

氏名 林 龍也  
授与した学位 博 士  
専攻分野の名称 医 学  
学位授与番号 博 甲第 7569 号  
学位授与の日付 2026年3月25日  
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻  
(学位規則第4条第1項該当)

学位論文題目 Total Thymectomy Is Oncologically Superior to Partial Thymectomy in Patients with Thymic Carcinoma: Insights from a Multicenter Real World Data Analysis  
(胸腺癌患者における全胸腺摘出術は部分胸腺摘出術よりも腫瘍学的に優れている：多施設共同実臨床データ解析からの知見)

論文審査委員 教授 富樫庸介 教授 松川昭博 教授 堀田勝幸

#### 学位論文内容の要旨

背景：近年、早期胸腺腫では胸腺部分切除術が胸腺全摘術と同等の成績を示すとの報告が増加しているが、胸腺癌に対する有効性は明確ではない。

方法：2010年1月から2021年12月に19施設で胸腺癌患者106例に胸腺切除術が行われた。本研究では、不完全切除14例を除く胸腺全摘術(n=73)または胸腺部分切除術(n=19)を受けた92例を解析した。全生存期間(OS)および無再発生存期間(RFS)は、カプラン・マイヤー法およびCox比例ハザードモデルを用いて評価し、交絡因子調整にオーバーラップ重み付け法を用いた。

結果：臨床病期Iの79.3%が術後に病期II以上へアップグレードを認めた。未調整解析では、両群間にOSおよびRFSの有意差は認めず、部分切除群で予後不良な傾向を示した。一方重み付け後の解析では、部分切除群においてOSが有意に不良(p=0.0027)であり、再発リスクも有意に高かった(p<0.0001)。

結論：胸腺癌では胸腺部分切除術は有意に予後不良であった。未診断の胸腺上皮性腫瘍に対しては腫瘍学的制御と再発抑制のために胸腺全摘術が依然として推奨される。

#### 論文審査結果の要旨

早期胸腺腫では胸腺部分切除術が胸腺全摘術と同等の成績を示すとの報告が増加しているが、胸腺癌に対する有効性は明確ではない中で、本研究では胸腺癌に対する胸腺全摘術と胸腺部分切除術を受けた患者の予後を解析した。患者背景の未調整解析では、両群間に生存期間および無病再発期間の有意差は認めなかったが、部分切除群で生存期間および無病再発期間が優位に短かった。従って、未診断の胸腺上皮性腫瘍に対しては腫瘍学的制御と再発抑制のために胸腺全摘術が依然として推奨されることが示唆された。

実臨床での生検・病理診断のプロセス、ロボット手術による侵襲が減ることを考慮した場合の将来の治療体系、病理学的解析やゲノム解析といった生物学的特性に関して質問があった。外科と内科で前縦隔腫瘍への生検・病理診断の必要性に対する考え方に少し違いがある議論、ロボット手術は侵襲も少ないので、使用可能な施設では全摘の方向に進む可能性が高いこと、希少な疾患なので検体も平行して収集しており引き続き研究を行う旨の回答があった。

以上から、本研究は今後の胸腺癌治療に繋がる重要な結果であり、価値ある業績と認める。よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。